

農学部 4年

高田 咲

タンザニア、シンガポール

2018年9月6日-

2018年9月27日



渡航概要と内容

1. タンザニア (9/6~9/17)

日程：9/6 タンザニアに向けて出発

9/8-9/11 コーヒー農場（混作）の見学／農家の方々への聞き取り調査—at ルカニ村

9/12-9/15 コーヒーの競売・加工場視察—at モシ

台風21号が関西を直撃し、関西国際空港が機能停止したが、私は伊丹から成田に飛ぶ渡航経路だったため何事もなく渡航できる予定だった。しかし、伊丹空港で乗るはずの便が機材トラブルで欠航になり、その他の便に変えることも不可能というアナウンスが流れた。そこで急いで陸路で成田まで向かうことになり、予定していた成田発の便にぎりぎり間に合うことができた。出発から出国できるかわからない状況になり、本当に不安だったが、やるべきことを焦らずに冷静に行動に移すことの大切さと難しさを味わった。

目的地のルカニ村には、ダルエスサラームから車で13時間かかった。本当に遠かった。しかし、到着してからは自然の空気に触れ、満天の星空を味わい、牛の声に起こされ、リラックスできた。ルカニ村ではコーヒー畑の見学、農協やマーケットの視察およびお話を伺った。またコーヒーの果実の採集や殻剥き、苗木の植え付けも体験した。日本の農場と違い、家の周りにはランダムに多様な作物が植わっており、道もない斜面に多くの作物が植えられていた。しかし、最近ではバナナ：コーヒー＝1：3の割合で耕作する方法が広まっていて、より効率がいい耕作方法として推奨もされている。個人農家は伝統的なランダムな栽培をしているところも少なくないが、大規模の農場を視察した時は全て1：3の方法で栽培されていた。

また、渡航中に1日半の停電があり、雪のような冷水しか出ないシャワーとろうそくの明かりでの生活を体験した。しかもこの停電は私の使っていたドライヤーが電力をかなり消費するた

め、ショートしたのだと推測できた。そのため、それ以降自主的にドライヤーは禁止し、使用電力が多くならないように気を付けた。

モシではコーヒーの取引市場の視察とカップテストの体験を行った。今年のコーヒーの取引価格はかなり低く、農家の暮らしが脅かされないか不安である。

2. シンガポール (9/19~9/27)

日程：9/19 シンガポールに向けて出発

9/20-9/22 シンガポールの知人の家にホームステイ。地元の人が良く使う市場を視察。

9/23 citizen farm 経営者にお話を伺う

9/24 citizen farm の農場見学

9/25 comcrop (ビル屋上農場) 視察

9/26 市内のスーパーの農産物販売エリアを比較

台風 21 号の影響で 18 日出発予定の便が 19 日に振替になったが、タンザニアの時と違い、ほとんど問題がなくシンガポールに行くことができた。しかし今度は渡航前私の体調が非常に悪く、タンザニアから帰国後、マラリアかと疑うくらいに体調を崩してしまった。頭痛と吐き気があり、何も食べられない状態だったが、マラリアの症状である高熱はないことから渡航を決めた。渡航後すぐは体調が悪く、ホームステイ先の家でしばらく休ませていただいた。

地元の人しかいないという市場に連れて行ってもらい、どこからどのような食材が来ているのかを確認した。最も興味深かったのは、値段のプレートに産地を表示していないということである。商品のシールを注意深く見てやっと産地が分かる。ばら売りされているものについては、店員に聞かないとわからないものまであった。

また、23 日には視察する予定の農場の経営者とお話する機会を得ることができた。日本の農家の現状などを話し、これからの農業について話し合った。自分にはない視点の話を多く聞いて、とても良い機会になった。24 日には事前にアポイントを取っていた農家を訪れた。小規模で都市農業を行う農家で、幼虫を用いた循環型農法を行っているとのことだった。また商業施設やオフィスに、収穫し食材にできる植物を使ったガーデンを作る事業も行っており、実現したら見に行きたい。ただ、シンガポール特有の土地の困難があることも分かった。農家も含めすべての経済組織は、初めに契約した期間を過ぎたら必ずその土地を移らなければいけないらしい。だから、シンガポールで有機栽培など経営安定に時間がかかる農法はなかなか実行が難しいと言っていた。

25 日にはシンガポール発の屋上型農園を訪れた。オーチャードという町の中心部にある商業施設の屋上を使い、農園を営んでいる。違う場所に 2 つ目の屋上農園を建設しているが、商業施設で農場を営むことは法律上難しいらしく、行政が管理する商業施設の屋上を借りることで法律的に複雑な部分を乗り越えたいらしい。

最終日は 5~6 件のスーパーを巡ったが、大規模のスーパーや百貨店に併設されている日本人向けスーパーでは産地の表示が分かりやすく書かれているところもあった。ただ、それ以上に“オーガニック”野菜のブースが作られているところが多く、産地以上に重視されていることが分か

った。また、シンガポール産の野菜は見つけれないところが多く、地元のレストランや契約販売をしているところが多いのではないかと思った。



コーヒー畑



コーヒー豆の選別



屋上型農園



市場の野菜売り場

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

・タンザニア

まず坂の斜面に植わっている状態を“畑”と呼ぶことに驚いた。見た目は日本でいう“林”に似ているが、その土地（斜面）からコーヒーを収穫し、バナナやアボカドも採集する。ある程度土地を耕し、平らにした土地に栽培するものだと思っていたため、アグロフォレストリーが本当に森林の状態の畑で、自分の先入観を改めさせられた。また採集は全て人によって行われ、加工での不良豆の除去も高品質のもの（日本に輸入されているもの）はすべて人の手で行われているなど、コーヒーには本当に多くの労働力が投入されているということも実感した。しかし取引市場を視察した時コーヒー価格が今年は低く、すべての労働者に十分な支払いができるのか不安に

なった。彼らが同じ労働を行って作った作物を、経済システムという理由だけで年々違う価格で取引しているのだろうか。

そして、タンザニアの未発達なインフラや経済格差の現実を見、自分の暮らしがどれだけ恵まれているかということも実感した。今回はたった10日間であり、全てを知れたわけでは決していないが、コーヒー1杯にどれだけの人が関わり、その人の暮らしを支えているのか学ぶことができよかった。

・シンガポール

シンガポールに着いた時、緑が多いと思い、自然と調和した都市の形成を目指していると感じた。オフィスや商業施設・マンションを見ても植物が必ず植わっている。政府が率先してやっているのだろうかと思い、農場のある人に聞くと、政府管轄の植物専門の組織があるらしく、その組織が全て管轄していることが分かった。また、訪れた商業施設屋上にある農園は、以前の法律では経営が不可能だったが、行政が法律を変えてくれたといていた。これらのことから、シンガポールは国を挙げて本格的に新しい都市を形成していると感じた。自然や農園が都市と一体になった未来型都市は、日本もぜひまねしてほしいと思う。

また、農業には全く関係がない部分だが、衝撃だったのはみんなが当たり前前に英語を話しているということだ。公用語が英語だから当たり前ではあるが、マレー系の人にはマレー語と英語を普通に話すことができる。一方日本では英語ができることが“すごいこと”とされることが多い。私と同じかそれより若い人たちが当然のように母国語と英語を使いこなして生きている姿を見て、自分の至らなさを痛感したと同時に、より語学勉強に励まないといけないと感じた。さらに、農場の経営者と話している時に、日本の農園は知りたいが英語ができる人がいないから知ることができないと言っていた。日本ももっと国際的になり、農業分野も世界と交流できるようになるべきだと感じた。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

タンザニアの渡航を通して、ルカニ村のコーヒー豆を買っていきたくと思った。また、多くの人が知らないコーヒーの事実をまずは身近な人に伝えていきたい。加えて、バナナや紅茶などコーヒー以外の途上国とつながっている食料に関しても、生産や労働についてもっと知っていこうと思う。

シンガポールでは、見たり調べたりすることと同じくらい、人と話すことが大切だと感じた。しかしその際、語学の壁を感じる事が多く自身の圧倒的な語学力不足を感じた。そのため、これからも語学の勉強は力を入れていきたい。また、ある人に聞くだけの情報を鵜呑みにするのではなく、自分でデータを見て納得することが大切だと教えられた。私はこれから卒業論文を書く必要はないが、その時参考にする情報もしっかり自分でも納得できるまで情報を収集して、卒業論文を書いていきたいと思う。

今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

私はこの旅で想像していたことよりもたくさんを知ることができました。時には大きく予定を変えざるをえない時もありましたが、それも含めて冒険なので、自由に自分が思うとおりに行動したらいいと思います。

主な奨学金の使途

*渡航費

*滞在費

*交通費・調査費

*海外旅行保険、ビザ など



早朝にミルクを生協に集める人々



コーヒー豆の選定には多くの女性の労働力が使われています。



価格はお店の人と交渉。産地などのブラカードはありません。